

2023年5月28日 ペンテコステ礼拝メッセージ

「ビューン ピトツ ワイワイ ザワザワ」

岡嶋千宙伝道師

聖書 使徒言行録 2章 1-13節

2週間前の木曜日。「これはもしや聖霊の降臨?」と思いたくなる出来事がありました。その話から始めたいと思うのですが、その前に一つ確認しておきたいことがあります。「聖霊」のイメージ。聖書では様々に描かれます。例えば、本日の御言葉にある「風」とか「炎」。そして、おそらく、キリスト教の業界で一番よく知られているものとして「鳩」。イエスが洗礼を受けた際に「鳩」のような霊が降ったと、4つの福音書には記されています(マタイ3:16、マルコ1:10、ルカ3:22、ヨハネ1:33)。これを踏まえて、2週間前の出来事。18日の午前9時過ぎでした。大阪での仕事があったので、近鉄奈良駅から電車に乗り、乗り継ぎのために大和西大寺のホームで電車を待っていたとき。雑音や、ランダムに飛び込んでくる視覚情報が苦手なので、ヘッドホンで音楽を聞いて、タブレットで本を読んでいた。読んでいたのは聖書。聞いていたのは現代版のワーシップソング、讃美歌のようなもの。イギリスやアメリカの歌手の曲が多いのですが、他の国のものもあって、多言語の歌をききながら聖書を読み、電車を待っていたのです。すると・・・降ってきました! 頭上から、わたしの目の前、十数センチのところに、上からビューっと。聖霊降臨節が近いこともあり、「いよいよ、自分にも来たかー!」と感動して上を見ると、そこには、鳩。聖霊にたとえられるあの鳩です。その鳩と目があった瞬間、「やばい!」。上から落ちてきたものがある場所に目をやると、やっぱり、ありました。聖霊、ではなくて、うんち。そうと分かったら安心していただけません。2発目がくるかも、と警戒し、身体を動かそうとしたそのとき、ズビューン!! 2発目。幸い、頭の上に落とされることはありませんでしたが、タブレットの上に見事な着地。ピトツ、ではなく、ビチャツ。聖書の言葉を開いていたタブレットの上に、聖霊にたとえられる鳩の糞が落ちて来たのです。日本語では「ラッキー」の「運」と、「うんち」の「うん」をかけて、「^{うん}運が付くのは縁起が良い」と言われることもあるみたいですが、残念ながら、わたしには、その日もそれ以降も、これとって良いことは起こりませんでした。ということで、すみません。いきなりうんちの話。わたしに降り注いだのは、鳩の糞でしたが、今日の御言葉が記すのは、鳩にたとえられる聖霊です。ほんものの聖霊が降り注ぐ。まずは聖書の記述に基づいて内容を確認します。

使徒言行録と同じ著者が記したルカ福音書によると、イエスは、ユダヤの人たちにとって最も大切な祭りのひとつ、^{すぎこしさい}過越祭の日に十字架上で息を引き取りました。それから3日後、イエスは復活し、弟子たちを含めて、彼を信じていた人たちの前に、40日間にわたって姿を現します。弟子たちとの交わりを経て天に帰ったイエス

は、それから 10 日後に、地上に残された信者たちのために聖霊を送りました。その日は、イエスの死、つまり過越祭の日からちょうど 50 日後だったということで、過越祭から 50 日目に祝われる「五旬祭の日」の出来事として、記されているのが本日の御言葉です。イエスが天に帰られたあと、彼を信じる人たちはエルサレムの宿泊所を集って、「心を合わせてひたすら祈」っていました(1:14)。その数 120 人。イエスを裏切ったユダを除いた 11 人の弟子、イエスの家族、イエスを慕っていた女性や、聖書には記されていませんが、子どももいたことでしょう。その集団が一つのところで祈っていたある日のこと、突然、激しい風が吹き荒れ、その音が家中に響き渡りました。『ビューーンツ。』それがおさまったかと思うと、今度は「炎のような舌」が、人々の上に降り注ぎます。『ピトツ。』その舌に導かれるかのように、人々は聖霊に満たされ、様々な国の言葉で語り始めました。『ワイワイ。』その話し声を聞いたエルサレムの人々は、「何事だ!」と信者たちのいた家に駆け馳せ、ガリラヤ出身のその集団が、ガリラヤ以外の地域の言葉で話している光景を目にします。人々は驚き様々に推測します。「あいつらは頭がおかしくなったのではないか。」「真っ昼間から酒を飲んで酔っぱらってるのではないか」『ザワザワ』これが本日の箇所の大筋で、その後、はじめのうちは、驚きと戸惑いに迎えられた信者集団でしたが、リーダーであるペトロの雄弁もあって、エルサレムの人たちに信用されるようになっていきます。そして、信者たちの言うことを信じる人たちがどんどん増え、最初は 120 人だったのが、一日で 3000 人を越え、その後も、日に日にその数は増えていったのです。日に日に信者の数が減り、教勢の衰退が懸念される日本の教会の現状を考えれば、なんともうらやましい限りですが、本日与えられているのはその前。そこに留まって、御言葉に向き合います。聖霊降臨とは？ そのとき何が起こったのか？ イエス、そして神の霊である聖霊に満たされるというのは、どういうことなのか？ その結末だけではなく、前後の場面を含め、人々の有り様を踏まえて、この箇所を見ていきます。

キーワードは、「言葉」と訳されている言葉。聖書協会共同訳では、4 回記されています。日本語では同じ単語で訳されていますが、原文のギリシア語では、二つの異なる単語が用いられています。一つは、4 節と 11 節の「言葉」(グロッサ)。もう一つは 6 節と 8 節の「言葉」(ディアレクトス)。どちらも「言葉」と訳すことのできる単語ですが、ニュアンスが異なります。順番を前後して、後者ディアクレトスのほうは、狭い意味での「言葉」。言葉そのもの、つまり、各地・各国の言語あるいは方言という意味です。これに対して、前者グロッサはより広い意味を持ちます。単に言語というだけではなく、その背景にある、たとえば人々の生活や習慣、あるいは個々人の感情や性格、思いなどをも表しうる単語です。3 節で、聖霊としてたとえられている「炎のような舌」という表現の「舌」もこの単語が訳されたものです。本

日の箇所の前場面。11人の弟子、イエスの母や兄弟、イエスに従っていた女性や子どもたちを含めた120人の集団は「ひたすら祈っていた」と描写されています。美しい表現ですが、要は、外に出なかった、ということ。閉じこもっていたのです。そんな引きこもり集団の中で響いていたのは、リーダーであるペトロの言葉だけ。内容からすると、他の人たちも何かしらの言葉を発していたのですが、聖書の記述としては残されていません。限られた人だけの言葉が響く静かな環境。それが一転します。風が吹き荒れ、激しい物音がし、人々の話し声が満ち、それを聞いた別の人たちの言葉も重なり、内と外との人たちの間で、新たな交わりが生まれます。動きに満ちた、まさしく聖霊に満たされた空間が造り出されていったのです。

イエスが死んだ直後、彼を信じ従っていた人たちはうちひしがれていました。ほとんどが、社会のマイノリティ、弱者で、多数から嫌われていた人たち。自分の人生を良いものにしてくれるであろうと期待し信じて、すべてを投げ捨てて従ったイエス。なのに、その人イエスは、道半ばで、いとも簡単に、惨めな姿で死んでしまいました。何も持たずに最後の望みをかけて従った人が、突然、いなくなる。「やばい！これからどうする」。おそらく、誰もが、自分のことしか考えられなくなっていたはず。そんな人たちが、復活のイエスとの出会いを通して変えられていきます。再びイエスに触れ、語りあう中で、彼女らは思い起こしていきました。イエスの歩み、その歩みの輪の中にいれられた自分自身の歩み。イエスはどんな人だったのか。様々な人に出会い、その人たちと語り合い、交わっていたイエスの姿。そして、自分を含めて、イエスに接する人たちとはどんな人だったのか。イエスと出会うことで、語り合うことで、何かを思い、何かを感じ、変えられていった自分や他の人たちの姿。イエスとの日々を思い起こしながら、イエスに従った人たちは、彼と共に歩んだ経験を、そのときの思いを語り始めました。自分の語るイエスと、他の人が語るイエスが、同じこともあれば、違うこともありました。でも、同じか異なるかは別にして、とにかく、イエスの姿を、イエスを信じた自分の姿を、共有していったのです。そして、あるとき、気づかされました。イエスの歩みとは、他者と共にある歩みだった。同じような背景を持つ者だけではなく、自分とは全く異なる人たちにも出会い、その人たちの声、言葉に耳を傾け、丁寧に聴いていた。そのイエスの姿と、今の自分たちのあり方とを比較したとき、見えてくる溝。自分だけではない。ここには他者の思いもある。わたしが心を吐き出すことができるとき、隣にいる人は？ その隣に、さらにその隣にいる人はどうだろう？ 自分と同じような境遇や思いの人は吐き出すことができるかもしれないけれど、それとは異なる思いを持つ人たちは？ その気づきを通して、彼女たちは、一人ひとりの思いを丁寧に聴きあうようになります。どんな内容であっても、どんな語り方であっても、途中で遮ることなく、判断を挟むのでもなく、それぞれの語りが紡がれるままにしました。苦しみ、不安、痛み、悲しみ、ある

いは喜び、さらには、自分自身の弱さすらも。それらすべてが乗せられた言葉が響き渡る。それぞれに、共感できることもあれば、できないこと、理解すらできないこともありました。それでも、違いを理由に否定せず、語りを妨げず、とにかく誰もが言葉を紡ぐことのできる状況を作り出していったのです。「炎のような舌(グロッサ)」(2:3)が降り注ぎ、「他国の言葉(グロッサ)」(2:4)で話し出す。それは、それぞれに違う経験をし、異なる思いを抱く一人ひとりが、他の誰からの判断や非難を受けることなく、それぞれの言葉、それぞれの語り方で、話すことができる。そんな状況が、初期の信者集団によって形成されていたことを伝えるものなのではないでしょうか。その姿が、エルサレム中に知られ、関心を集めるようになっていきます。イエスのことを知らない人たちにとって、イエスを信じる集団の語りは、まるで異国、別世界のもののように映ったことでしょう。けれども、その中には、彼ら自身の境遇と重なる部分があったのです。全く同じではないけれど、その痛み、分かる。その苦しみ、知っている。だから、まるで「自分たちの言葉(グロッサ)」(2:11)が話されているかのように、すんなりと入ってくる、心に染み入る、そんな言葉を、信者集団の語りの中に聴くことができたのです。

先月のメッセージで、2章 43-47節をもとに、聖霊に満たされた信者たちが形成していった初代教会の特徴が「共にあること」である、とお話ししました。その「共にある」ことの土台となっていたのが、本日の御言葉が描くもの、つまり、語りが紡がれるということにあります。一人ひとりの、異なりを持つ者たちの思いが乗せられた声が、響き続ける。それを可能にしたのが、聖霊の働きだったのです。翻って、現代のわたしたち。対面で、オンラインで、今、集っている一人ひとりの思いを乗せた言葉が響いているのでしょうか。誰かの声が遮られてはいないのでしょうか。もちろん、無理に言葉を紡ぎ、声を引き出せというわけではありません。けれど、安心して言葉を紡ぐことのできる環境をつくり出せているかどうか、問わずにはいられません。苦しみを抱えている人、声に出せない思いを抱いている人。確実にいます。自己責任が高らかに叫ばれ、弱音を吐き出せない世の中。人工知能・AIの飛躍的な発展により人間感情を伴わない実体が日々の生活に侵入してくる現代。一人ひとりの思いがないがしろにされ、個人の存在が置き忘れられていく。誰もが自分の思いを吐き出せる、安心して伝えられる、人としての思いを分かち合える。わたしを含めて、イエスを救い主として信じ、その歩みに倣うキリスト者は、そんな場をつくり出していくことにどれだけ真剣になっているでしょう？ 出会う一人ひとりのそばに寄り添い、その声を聴き、言葉に耳を傾けたイエスの姿をどれだけ体現できているでしょう？ 今一度、聖霊の導きを求めましょう。イエスを信じる者として、自分の、他者の、そして神の思いに、心を向けられるように。たとえ自分とは異なっても、隣人の思いが乗せられた言葉と声に耳を傾けることができるように。異なりを持つ人たちと、寄り添い合い、共に生きる喜びを感じるができるように。